

長寿医療研究開発費 2020年度 総括研究報告

認知症スティグマの評価尺度の日本語版の作成に関する研究（20－40）

主任研究者 野口 泰司 国立長寿医療研究センター 老年社会科学研究部（流動研究員）

研究要旨

目的 認知症スティグマ（負の烙印・表象）の克服は世界的にも重要課題である。しかし、認知症スティグマの評価尺度の発展は十分ではなく、特に日本において使用可能な尺度は存在しない。そこで本研究では、日本での使用可能な認知症スティグマの評価尺度を目的として、日本語版の作成およびその信頼性の検討を行った。

方法 認知症スティグマの文献レビューを行い、概念整理を行うとともに、海外の原尺度候補を選定した。順翻訳・逆翻訳を施し認知症スティグマ評価尺度の日本語版を作成した。年齢分布、性別が均等になるよう一般成人を自由意思に基づいてリクルートし、作成した日本語版認知症スティグマ評価尺度について、テスト・再テスト法により信頼性の検討を行った。

結果 認知症スティグマのうち公的スティグマに着目し、**University of Wollongong Scale**の日本語への翻訳を行った。20代から70代の一般成人34人（平均年齢＝45.8歳）に対して、テスト・再テストの級内相関係数の算出し、中程度以上の信頼性が確認された。

考察 日本語翻訳を施した認知症スティグマ評価尺度は、一部の項目を除き比較的良好な信頼性が確認された。今後、本尺度の因子的妥当性、基準関連妥当性を検証し、尺度の確立を行う必要がある。

主任研究者

野口 泰司 国立長寿医療研究センター 老年社会科学研究部（流動研究員）

分担研究者

尚 爾華 愛知東邦大学 人間健康学部（教授）

A. 研究目的

認知症スティグマ（負の表象・烙印）は、認知症に対する無理解や偏見、排除であり、認知症やその家族への否定的な感情や社会構築、さらには保健医療サービスにおける差別

のような形で現れる（朝田, 2013）。また、認知症への社会的態度の劣化や妥当性を欠いた医療・ケアの原因となる可能性があり、認知症の早期発見・早期治療の遅延や認知症本人の社会参加や高齢者の予防行動の阻害、さらには家族介護者の精神的負担などにも関連する。そのため、2012年に世界アルツハイマー協会は「認知症スティグマの克服」を提言し（Alzheimer's Disease International, 2012）、2013年のG8 ロンドン認知症サミット最終宣言にも組み込まれ（GOV. UK, 2013）、認知症スティグマの低減・対策は世界戦略となっている。

一方で、日本においては2019年に認知症施策推進大綱が提言され、認知症との共生を予防と並んでの主目的として掲げている（厚生労働省, 2019）。共生については、認知症に関する理解促進を第一としており、認知症スティグマの克服は日本の認知症施策推進においても必須である。

しかし、認知症スティグマの評価尺度は、日本ではほとんど確立されておらず、その実態の把握や施策の評価が困難である。したがって本研究では、認知症スティグマについての先行研究レビュー、海外の原尺度の日本語翻訳、信頼性の検討を行い、日本にて使用可能な認知症スティグマの評価尺度の作成のための予備的な検討を行うことを目的とした。

B. 研究方法

1) 認知症スティグマに関する文献レビュー

ハンドサーチにより認知症スティグマの概念について、および評価尺度についての文献レビューを行い、概念整理と候補となる原尺度の選定を行った。

2) 認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成

選定された認知症スティグマ評価尺度の原尺度について、日本語版への翻訳を行った。翻訳は、主任研究者のほか研究協力者1名が独立して日本語への順翻訳作業を行った。それぞれの翻訳案について、主任研究者と研究協力者に加え、高齢者心理学の研究者1名も交え合同で討議を行い、2つの翻訳案の統合を行った。統合された翻訳案について、英語を母国語とする第3者により逆翻訳作業が施された。逆翻訳版と原尺度にて不一致が生じた場合は、順翻訳をやり直し、再度逆翻訳作業を行ったのち原尺度との一致を確認した。なお、尺度の日本語版への翻訳については、原著者について許諾を得た上で行った。

3) 認知症スティグマ評価尺度の日本語版のテスト・再テスト信頼性の検討

20代から70代の一般成人を対象に、作成した認知症スティグマ評価尺度の日本語版の信頼性の検討を行った。対象者は、公的機関の職員、地域の公的施設（公民館等）を利用する中高齢者、大学生から、自由意思に基づきリクルートされた。この際、各年代が男女同数になるようリクルートされ、35名に調査票が配布された。対象者には、認知症スティグ

マ評価尺度の項目への回答を2回依頼し、1回目の回答から2週間後に同一の調査票への回答を依頼した。

解析は、認知症スティグマ評価尺度の日本語版の各項目におけるテスト・再テスト信頼性の検討として、2回の回答についての級内相関係数（ICC）を算出した。

（倫理面への配慮）

本研究は、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター倫理・利益相反委員会の承認のもと実施した（No. 1506）。なお、対象者には、調査協力は自由意思に基づくこと、調査への不参加や参加同意の撤回について不利益を被ることはないことを口頭および書面にて十分に説明し、対象者の十分な理解に基づき、書面にて研究参加への同意を得た。また、アンケートは無記名とし、アンケート内容と個人情報が紐づかないよう配慮した。

C. 研究結果

1) 認知症スティグマの概念整理

国内外の文献レビューをとおり、認知症スティグマの概念整理を行った。認知症スティグマの概念は多数存在し、明示的な定義は存在しない一方で、近年のシステムティックレビューでは、概念的なフレームワークが提案されている（Nquyen T and Li X, 2020）。Nquyen らは、認知症スティグマを公的スティグマ（public stigma）と自己スティグマ（self-stigma）に分類し、それぞれ①ステレオタイプ、②偏見、③差別の3つの側面から整理している（Nquyen T and Li X, 2020）。本研究ではこの概念を援用し、一般住民等の社会集団において生じる公的スティグマに着目することとした。

また、認知症スティグマの評価尺度についてのシステムティックレビューから、上記の概念を包含する尺度として、University of Wollongong Scale（Phillipson L, et al., 2012）を原尺度候補として選択した。

2) 認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成

University of Wollongong Scale を順翻訳・逆翻訳をとおして、日本語版の作成を行った。

3) 認知症スティグマ評価尺度の日本語版のテスト・再テスト信頼性の検

一般成人 34 人（回収率 97.1%）を最終解析対象とした。対象者の平均年齢は 45.8 歳（標準偏差=17.5）であり、女性は 19 人（55.9%）であった。

各項目についてのテスト・再テストの級内相関係数を算出した。全 31 位項目のうち、16 項目は高度な一致以上の信頼性を示した（ $ICC \geq 0.6$ ）。12 項目は中等度の一致を示した（ $ICC \geq 0.4$ ）。一方で、1 項目のみ軽度の一致を示した（ $ICC < 0.2$ ）。

D. 考察と結論

本研究は、日本において使用可能な認知症スティグマの評価尺度の作成を目的に、文献レビューによる概念整理、海外の原尺度の日本語翻訳による日本語版の作成、作成された評価尺度の信頼性の検討を行った。本研究では一般住民等の社会集団において生じる公的スティグマに着目し、順翻訳・逆翻訳を施した **University of Wollongong Scale** の日本語版は、ほとんどの項目にて一定の信頼性が確認された一方で、一部の項目について信頼性が低かった。本結果は中間解析結果であるため、今後はトータルスコアの信頼性の検証および妥当性の検証をとおり、日本で使用可能な認知症スティグマの評価尺度の確立を行っていく必要がある。

一般的に、スティグマは人々が一般化された否定的な信念を内在化し（ステレオタイプ）、それが否定的な感情反応（偏見）や否定的な行動反応（差別）となって現れることで発生すると言われている（**Alzheimer's Disease International, 2019**）。認知症に対する公的スティグマは、認知症の人の社会関係、社会的役割の喪失、意思決定からの排除、診断結果の遅れや保留、サービスや治療の制限などの形で影響を受ける可能性がある。さらには、公的スティグマは認知症の人の自己スティグマの内在化や、「**Courtesy stigma**」と言われるような家族や友人の排除にも繋がる可能性があるため、認知症との共生を達成するにあたり公的スティグマの克服は重要課題の一つである。

認知症スティグマの低減には、エビデンスは限られるものの、認知症についての学習機会の担保、認知症の人との接触・交流などいくつかの方法が提案されている。日本における認知症サポーター養成講座をはじめとした啓発活動や、認知症カフェなどの社会参加の促進は、認知症スティグマ低減に対する有用な戦略である可能性がある。認知症スティグマの評価尺度の構築により、これらの事業・政策評価が可能となるとともに、疫学調査をとおした関連要因や予測要因の同定により、新たな介入方法の探索や認知症の人にやさしい地域づくりの構築に向けた基礎データの収集が可能となると考えられる。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Noguchi T, Nakagawa-Senda H, Tamai Y, Nishiyama T, Watanabe M, Kamiya M, Wakabayashi R, Hosono A, Shibata K, Ichikawa M, Ema K, Nagaya K,

- Okamoto N, Tsujimura S, Fujita H, Kondo F, Yamada T, Suzuki S. The Association between Family Caregiver Burden and Subjective Well-Being and the Moderating Effect of Social Participation among Japanese Adults: A Cross-Sectional Study. *Healthcare*, 8(2) 87, 2020.
- 2) Noguchi T, Nakagawa-Senda H, Tamai Y, Nishiyama T, Watanabe M, Hosono A, Shibata K, Ichikawa M, Wakabayashi R, Kamishima H, Ema K, Nagaya K, Okamoto N, Tsujimura S, Fujita H, Kamiya M, Kondo F, Yamada T, Suzuki S. Neighbourhood relationships moderate the positive association between family caregiver burden and psychological distress in Japanese adults: a cross-sectional study. *Public Health*, 185:80-86, 2020.
 - 3) Tsuji T, Saito M, Ikeda T, Aida J, Cable N, Koyama S, Noguchi T, Osaka K, Kondo K. Change in the prevalence of social isolation among the older population from 2010 to 2016: A repeated cross-sectional comparative study of Japan and England. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 22:91:104237, 2020.
 - 4) Ikeda T, Cable N, Saito M, Koyama S, Tsuji T, Noguchi T, Kondo K, Osaka K, Aida J. Association between social isolation and smoking in Japan and England. *Journal of Epidemiology*, 2020. (Advance publication)
 - 5) Noguchi T, Kondo F, Nishiyama T, Otani T, Nakagawa-Senda H, Watanabe M, Imaeda N, Goto C, Hosono A, Shibata K, Kamishima H, Nogimura A, Nagaya K, Yamada T, Suzuki S. The Impact of Marital Transitions on Vegetable Intake in Middle-aged and Older Japanese Adults: A 5-year Longitudinal Study. *Journal of Epidemiology*, 2020. (Advance publication)
 - 6) Saito M, Aida J, Cable N, Zaninotto P, Ikeda T, Tsuji T, Koyama S, Noguchi T, Osaka K, Kondo K. Cross-national comparison of social isolation and mortality among older adults: A 10-year follow-up study in Japan and England. *Geriatrics & Gerontology International*, 21(2) 209-214, 2021.
 - 7) Noguchi T, Wakabayashi R, Nishiyama T, Otani T, Nakagawa-Senda H, Watanabe M, Hosono A, Shibata K, Kamishima H, Nogimura A, Nagaya K, Yamada T, Suzuki S. The Impact of Job Conditions on Health-Related Quality of Life among Working Japanese Older Adults: A Five-Year Longitudinal Study Using J-MICC Okazaki Study Data. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2:95:104385, 2021. (Advance publication)
 - 8) Noguchi T, Saito M, Aida J, Cable N, Tsuji T, Koyama S, Ikeda T, Osaka K, Kondo K. Association between social isolation and depression onset among older adults: a cross-national longitudinal study in England and Japan. *BMJ Open*, 11:e045834, 2021.

- 9) Noguchi T, Nojima I, Inoue-Hirakawa T, Sugiura H. Association between Social Frailty and Sleep Quality among Community-Dwelling Older Adults: A Cross-Sectional Study. *Physical Therapy Research*, 2021. (Advance publication)
- 10) Noguchi T, Nojima I, Inoue-Hirakawa T, Sugiura H. Role of non-face-to-face social contacts in moderating the association between living alone and mental health among community-dwelling older adults: a cross-sectional study. *Public Health*, 194;25-28, 2021. (Advance publication)

2. 学会発表

- 1) Shang EH, Noguchi T, Hida S, Nakano M, Kitazawa K, Mori M. The effect of “Kayoino-ba” activities as the Japanese preventive measure of long-term care on psychological and physical conditions among older people participants: A case report by action research. 52nd APACPH. (2021年3月採択)
- 2) 野口泰司, 中川弘子, 西山毅, 渡邊美貴, 細野晃弘, 柴田清, 山田珠樹, 鈴木貞夫. 高齢期の就労および働きがい健康関連 QOL に及ぼす影響 : 5 年間の縦断研究. 第 62 回日本老年社会科学会. 2020 年 6 月, 誌上開催.
- 3) 野口泰司, 近藤文, 中川弘子, 西山毅, 渡邊美貴, 山田珠樹, 鈴木貞夫. 高齢期の就労は死別による健康関連 QOL の低下を緩和する : 5 年間の縦断研究. 第 62 回日本老年医学会学術集会. 2020 年 8 月. Web 開催.
- 4) 野口泰司. 芸術活動と抑うつ発生の関連 : 地域高齢者の 3 年間の縦断研究. 第 5 回 NCGG サマーリサーチセミナー. 2020 年 8 月. 愛知.
- 5) 近藤文, 渡邊美貴, 今枝奈保美, 後藤千穂, 柴田清, 神谷真有美, 野口泰司, 上島寛之, 西山毅, 中川弘子, 山田珠樹, 鈴木貞夫. 一般住民における野菜不足と肥満との関連 : J-MICC Study 岡崎研究. 第 67 回日本栄養改善学会学術総会. 2020 年 9 月. 誌上開催.
- 6) 野口泰司. 新型コロナウイルスに対する予防理学療法の視点と対応 COVID-19 情報収集事業の成果報告「社会的制約とその改善に向けて」. 第 7 回日本予防理学療法学会学術集会. 2020 年 9 月. Web 開催.
- 7) 野口泰司, 近藤文, 渡邊美貴, 今枝奈保美, 後藤千穂, 大谷隆浩, 中川弘子, 細野晃弘, 柴田清, 上島寛之, 永谷憲司, 鈴木貞夫. 中高齢期の婚姻状況の変化が野菜摂取量に及ぼす影響 : 5 年間の縦断研究. 第 79 回日本公衆衛生学会総会. 2020 年 10 月. Web 開催.
- 8) 野口泰司, 野駑一平, 井上倫恵, 杉浦英志. 独居高齢者の精神的健康度に対する対面・非対面の社会的交流の緩和影響 : 横断研究. 第 7 回日本地域理学療法学会学術大会. 2020 年 11 月. Web 開催.
- 9) 野口泰司, 石原眞澄, 村田千代栄, 近藤克則, 斎藤民. 芸術・文化的活動と抑うつ発

生との関連：JAGES 縦断研究. 第 31 回日本疫学会学術総会. 2021 年 1 月. Web 開催.

G. 知的財産権の出願・登録状況
なし

3. その他
なし